芸術的探究としての中学校音楽科鑑賞授業における子どもの「想像的思考」に関する教育実践学的研究

学籍番号 219347
氏　　名 三好 雅
主指導教員 兼平 佳枝
副指導教員 澤田 和夫

１．研究の背景

筆者がこれまでに経験した音楽科鑑賞授業は、受動的で退屈な活動が多かったという印象が強く残っていたことから、従来の音楽科鑑賞授業には、子どもが自分で思考し表現する機会が不足していたのではないかと考えた。そこから、音楽科授業における思考について研究を進める中で、J.デューイの探究理論に基づいた芸術的探究としての音楽科授業に関する研究に興味を持ち、さらに、音楽科授業においては「想像的思考」というイメージが関わる思考が働くということがわかった。しかし、それらの先行研究では、表現領域での授業実践が行われている場合が多く、本研究において、芸術的探究としての中学校鑑賞授業で実践研究を行い、子どもがより豊かに「想像的思考」を働かせるための具体的な手立てを明らかにすることで、子どもが自分で思考し表現する音楽科鑑賞授業を実現するための手がかりが得られると考えた。

したがって、本研究の目的は、芸術的探究としての中学校音楽科鑑賞授業において、子どもがより豊かに「想像的思考」を働かせるための授業の手立てを、教育実践学的な方法で明らかにすることである。研究の方法として、まず、J.デューイの著書を参照し、芸術的探究としての音楽科授業についてまとめる。次に、音楽科教育に関わる書籍や論文を参照し、音楽科における「想像的思考」について整理する。そして、それらの内容を踏まえ、中学校音楽科鑑賞の研究授業の計画・実践・分析を行う。最後に、結論と考察を述べる。

２．芸術的探究としての音楽科鑑賞授業

本研究における J. デューイによる芸術的探究を「人間と環境が相互作用している状況において、人間に戸惑いをもたらす『不確定な状況』から、もとの状況より統一された『確定した状況』へと変容することを本質とした、質的な素材を扱う問題解決の活動」と定義した。そして、それを踏まえて、芸術的探究としての音楽科鑑賞授業を次のようにとらえることとした。芸術的探究としての音楽科鑑賞の授業では、質的な素材である音や音楽から喚起されたイメージや感情などを、自分なりに言葉で言い表したり書き表したりして音楽を評価する活動において、子どもは、音や音楽と相互作用しながら、状況の変容を伴う問題解決の過程を辿る。

３．音楽科鑑賞授業における「想像的思考」

本研究においては、音楽科鑑賞授業における「想像的思考」を「音や音楽のもつ質そのものを感受することを通して、その特質や雰囲気を過去の経験に基づいたイメージによって意味づけることで認知し、そのイメージを連続的に再構成していく働き」と定義した。そして、音楽科鑑賞授業における「想像的思考」が働く過程において、音楽とその背景との関わりを意識したり、その特質や雰囲気を生み出す要因となっている要素を知覚したりすることは、そのようなイメージによる意味づけの手助けになると考えられた。

４．研究授業の計画・実践・分析

芸術的探究としての音楽科鑑賞授業として、対象を中学校第 1 学年、教材を藤井凡大作曲《さくら 箏独奏による主題と六つの変奏》、指導内容を「変奏曲形式」とした研究授業を実践し、設定した視点に沿って分析を行なった。分析の結果は、以下の通りである。

【場面①】抽出生徒は、教師の声かけをきっかけに、主題部分に対する「春の夕焼けの時みたい」「さくらが 1 枚 1 枚落ちていってしまう感じ」「ふんわりとしていて昔みたい」「近くに川などの水がありそう」というイメージを形成していた。そこから、初めて全曲を聴いた際、主題部分の感じと変奏部分の感じの違いに対して戸惑いを感じ、そこから「変奏①②③は、それぞれどんな感じがするのか」という問題が設定された。そして、主題部分に対する「さくらが散る」というイメージと関わらせて考えたことや、板書されている意見や同じグループの生徒の意見がきっかけとなり、変奏①に対する「焦っている」「さくらが散る」「激しい」「盛り上がっている」「音が踊る」イメージ、変奏②に対する「落ち着いた」「悲しんでいそう」「音が響く感じ」「なめらか」「音を追いかけている感じ」イメージ、変奏③に対する「楽しくなった」イメージを形成し、その結果、問題が解決したと言えた。

【場面②】抽出生徒は、変奏①に対する自分のイメージと 6 班の「スペインっぽい」というイメージのずれに対して戸惑いを感じ、そこから「変奏①が『スペインっぽい』というのは、どういうことなのか」という問題が設定された。そして、その感じがするかを確かめようとして音楽を聴いたこと、その感じを生み出す音楽の要素について確認したことがきっかけとなり、変奏②に対して抽出生徒がすでに形成していた和風のイメージに加えて、洋風のイメージも形成されたということが推察でき、その結果、問題が解決したと言える。

５．結論と考察

研究の結果、結論は以下の通りとなった。子どもがより豊かに「想像的思考」を働かせるための手立てとして、①戸惑いを感じさせるきっかけとして、自己のイメージと音響とのずれや自己のイメージと他者のイメージとのずれを感じるような場を設定したり、②問題を解決するきっかけとして、他者との意見交流の場を設定し、その感じやそれを生み出す音楽の要素について、音や音楽との相互作用を通して確認させたりすることが挙げられた。

音楽科鑑賞の授業においては、最終的に批評文を完成させるという目的のもと、音や音楽と相互作用していく中で、音響や他者の意見に影響を受けながら、音や音楽に対するイメージが再構成されていく。つまり、音や音楽という質的なもののとらえ方自体が変化していくと言え、これは、子どもの情操を育てることにもつながると考えられるのではないだろうか。